

# マルサス對ゴツドウインの人口論争

伊 藤 久 秋

## 一 序 説

マルサス人口論（一七九八年）は周知の如く、マルサスが其父と膝を交へて、ゴツドウインの思想に關して論じたる、云はばさゝやかなる爐邊の論争に其端を發する。<sup>(註)</sup>一世を動かし百年を指導する大思想が一夕の閑談に緣由する興味ある一例を我々はこゝに見出す。

(註) この事は人口論初版の序文に次の如くあらはせる。"The following Essay owes its origin to a conversation with a friend, on the subject of Mr. Godwin's Essay, on avarice and profusion, in his Enquirer. ノムに於て『友人』が其父 Daniel Malthus へあつたことは、マルサスの傳記者によつて傳へられる。すなはち彼の學友オッター(Otter)がマルサスの著 Principles of Political Economy 第二版（一八三六年）に附したる傳記 Memory of Robert Malthus の中に次の如く云ふ。『マルサス氏の心は確かに、其父と全く意見を異にした一つの問題に關する何回もの論争の結果として人口の問題に向けられた。父は浪漫的な幾分多血的な氣質の人で人の完全性に關するコンドルセーとゴツドウインの意見を熱心に支持

し、これに對しマルサスの溫健な常識的感覚は常に反抗した。問題が屢々兩者の熱論の題目となり、子は其所信を、主として食料よりも速に増加する人口の傾向によつて置かるる障礙を基礎とするに及びて、その議論の要旨を熟考の便宜の爲に文書に書くことを求められた。この結果が人口論であつた。……これ著者自身が此傳記の筆者に語つた話の要領である。』(XXXVII) 因にマルサスは其若年の頃は自己の所信を貫く闘争性をもつてゐたことが此傳記に述べられてゐる。彼は『争の爲の筆を好んだ』(loves fighting for fighting's sake)『その當時の書翰を見ると、親子の感情がその爲に何等傷けられた譯ではないが、父の意見が、子のより優れた思慮によつて打破された例を一度ならず見出す。』(XXXIV)

マルサスと父との論談のテーマなりし『研究者』(Enquirer)中の『貪慾と浪費』avarice and profusionなる論文は、道德の原理は社會に於ける不平等を可及的縮少するを要求するとなし、貪慾と浪費の何れが此點に於て道德の原理に叶ふかを探究し、浪費は徒に労働者の労働を増加するのみにして、其賃銀を増さず、労働者の蒙る壓迫を加重するに過ぎずと斷じ、貪慾者の行爲は寧ろ害悪少しと結論するものである。恐らくマルサス父子は、此論文の結論よりも、寧ろ不平等の可及的縮少を理想とするゴッドウインの思想を主として問題とし、父はこれに替し子はこれを駁するに至つたものと推せられる。『研究者』はゴッドウインの名著『政治的正義』<sup>1)</sup>の延長である(多少の思想の變化を示してはゐるが)。マルサスはゴッドウインの『政治的正義』にあらはさるる平等主義に同ずるを得ず、その胸中に伏藏したる人口法則を持ち來つてこれに駁撃を加へんとしたものである。人口論第一版がゴッドウインを主とする一連の思想家を標的とすることは既に其表題に於て明示され、

- 1) W. Godwin, An Enquiry concerning Political Justice and its Influence on General Virtue and Happiness, 1793
- 2) An Essay on the Principle of Population, as it affects the future improvement of society, with remarks on the speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet, and other writers. London 1798

又三百九十六頁の冊子中百三十頁はゴッドウインの論駁にさへげらるゝ一事によつて證せらるゝ。

(註) 此結論に對してもマルサスは、アダム・スミスと對照してゴッドウインを斥けてゐる。スミスの *frugal man* は資本を増加し、生産的労働を働かすものであるが、ゴッドウインの *avaricious man* は富を死蔵するのみ、何等の労働を働かさない。 (1. st. ed., pp. 282-3) 併し此點の論争はさして大なる意義をもたないと思ふ。

マルサスの挑戦によつてゴッドウインは再び立ち三たび筆硯を新たにした。此間二十幾年を経過したが、兩人の對立は人性に關する根本見解の相違によつて起り又これを中心とした。(尤も一八二〇年のゴッドウインの「人口論」は此對立の單なる感情的延長と見得る)。

故に私は先づゴッドウインの立場を略述することによつて、此論争の跡を辿らう。

## 二 ゴッドウインの立場

ゴッドウインは所謂内在的原理 (*innate principles*) の存在を否定した。人は生來善又は惡の何等の傾向も有しない<sup>1)</sup>。人類が正義、應報、道德の觀念をもつに至つたのは極く後の事であつて、かゝる觀念は又到底小兒の心には存在しない<sup>2)</sup>。人々は外部の刺戟を受けて之を印象とする受動的能能力と此印象を思想に化する能動的理性力あるのみである。而て此理性こそ人の眞の原動力である。而て人の道德的行動は此思想に立脚する<sup>3)</sup>。人の道德的資質は人に加はる印象の産物であり、我々の徳と我々の惡は我々の生活の閱歷をつくる諸事件に源を發す

1) W. Godwin, *Political Justice*, 1. st. ed., p. 12  
2) Godwin, p. 17  
3) Godwin, pp. 318 ff.

る、故に若し、此等の出来事から正しからぬ傾向を取りたるならば、罪惡は世界よりそのあとを斷つであらう。<sup>1)</sup> 蓋し罪惡は誤謬の實行に移されたものに外ならない<sup>2)</sup>が理性は誤謬を征服するに十分の力をそなへるであらう。理性は又人を導いて絶えざる進歩と完成を圖らしめる。多數の發明と發見は人の完全性(Perfectibility)を十分に立證する。然るに政治(Government)は元來力に基きて發生し、正義又は効用又は幸福と矛盾する凡ての制度を支持し擁護し、以て誤謬を助長するのみならず、財産の不平等を永久化し、權威の中に人を束縛する。<sup>3)</sup> かくて政治は唯一の立法者たるべき理性の作用を障碍する。若し政治の支援がなかつたならば誤謬は怖るゝに足らず、又永續もしないであらう。<sup>4)</sup> 彼はトマス・ペイン(Thomas Paine)と共に云ふ。——社會は我々の慾望によりて生じ、政治は我々の邪惡により生れる。社會は如何なる状態に於ても天惠であり、政治は其最善の状態に於ても必然の惡である。<sup>5)</sup> 政治に代つて社會を支持するものは公平であり、一般的福祉に對する共同の考慮である。而してこれ理性の作用に外ならない。<sup>6)</sup> 理性の法則は智慮の擴張、徳の増進、人の獨立心の覺醒に最も貢獻する行爲と條件とを意味するものである。此の如き行爲と條件の總和がすなはち政治的正義である。<sup>7)</sup> ゴッドウインは此政治的正義の立場から私有財産に反對する。彼にすれば私有財産は不平等に導き人の心的進歩を不可能にする。富の所有は虚榮心と墮落とを生じ、貧乏は人を化して奴隸となし、理性と道徳心とを剿滅する。今日の社會に於て或者は過大の富をもち、或者は全く之を持たない。正義はかくの如きことを許さない。若しも財産の一方的蓄積が消滅するならば人類の勞働の大部分は不必要となり、殘餘は社會の働き得べき全員に公

1) Godwin, p. 18

3) Godwin, pp. 31, 33, 787 ff.

5) Godwin, p. 79

7) Godin, pp. 80 ff.

2) Godwin, p. 31

4) Godwin, p. 30

6) Godwin, pp. 157 ff.

平に分割され、何人に對しても苦痛とならないであらう。萬人質素ながら健全なる食物を攝り、何人も過剰な肉體的疲勞を感じることなく、友愛的感情の涵養と知識の進歩とを是れはかり得る閑暇を持つであらう。又今日の財産制度と離すべからざる關係をなす罪惡は消滅し、知識の進歩は極めて迅速となるであらう。ゴッドウィンは其未來社會の構造を詳しく説いてはゐないが、なほ個人を拘束する協同的或は共産的生活を排斥し、婚姻を非とし、個性の最善の發達をはかる獨立なる個人の集合を理想とするやうである。かゝる平等社會が人口の過剰によつて破壊されるとの反對論（これマルサスの論點ともなつたものであるが）に對しても彼は樂觀的見解を持つ。すなはち彼はウォレス (Wallace)<sup>4)</sup>の著書にあらはさるゝ此危懼に對して次の如く答へる。

「地球の住み得べき部分の四分の三はなほ未開墾のまゝにある。既墾の部分も測り知り得られぬ程の改良の餘地がある。人口増加をつづくること幾百萬年 (myriads of centuries) にして猶恐らく地球は其住民を養ふに足るであらう<sup>5)</sup>」

而て彼はなほ假にかゝる人口過剰が發生したる時には適當なる對策が考へらるゝであらうとし、若しこゝに想像を逞うするならば、精神が物質を支配する傾向の極まる所、終には人間が不死 (immortal) にならぬとも限らない。淘汰されたる道徳的精神は官能の享樂に無關心となり、従て人口の増加もこれ以上の膨脹が最早許されざる時に至らざれば、自らはれず、全人口は不死の成人より構成さるゝ一社會がこゝに現出するに至るであらう<sup>6)</sup>。

1) Godin, p. 806

3) Godwin, pp. 840 ff.

4) Various Prospects of Mankind, Nature and Providence, 1761

5) Godwin, p. 861

2) Godwin, pp. 807 ff.

6) Godwin, pp. 861 ff.

ゴッドウインは古き形而上學を攻撃したが、右述によつて判ぜらるゝ如く彼自らは最も大膽なる形而上學者に匹敵する程の經驗を超越したる絶對的教義の建設に傾いたと云へる<sup>1)</sup>。彼に於て感情と感覺は極度に踴躍し萬能の理性が其上に君臨した。『彼は道德の標準を人類の達し得ざる高所にまで引き上げた<sup>2)</sup>』同時代人コンドルセー(Condorcet)と共に、暴力と悪虐の跳梁する革命時代に棲息しつゝ常に渝はらざる夢想家として終始した事は一つの不思議である。

右の簡單なる叙述によつて私はゴッドウインの呼吸したる思想の世界を素描し得たと信ずる。マルサス對ゴッドウインの論争は二つの異なる頭腦の争であり、二つの異なる世界の背反である。ゴッドウインの棲む世界の雰圍氣を味ひ得て、經驗尊重の常識家、功利主義者、マルサスに對する時、兩人の確執、不一致は自らなる結果として理解される。

### 三 マルサスのゴッドウイン批判

マルサスは先づゴッドウインの考究が健全なる哲學の要求すると思はるゝ用意を以て進んでゐないことを責める。彼の結論は屢々彼の前提によつて許されてゐない。彼は又彼自らの提出せる反對論を斥くるに成功してゐない。彼は適用を許さざる一般的抽象的命題にたより過ぎてゐる<sup>3)</sup>。

- 1) Sir Lesli Stephen, English Thought in the Eighteenth Century. 1927, vol. II p. 267 參照
- 2) Hazlitt, The Spirit of the Age, Everym. Lib. ed., p. 184
- 3) Malthus, Essay on the Principle of Population. 1 st. ed., pp. 173—4 (Bonar の再刻書を用ふ); 7 th. ed., pp. 271—2

ゴッドウインの「平等の組織は、疑ひなく<sup>1)</sup>、未だ曾て見ざる最も麗はしき又最も魅惑的なものである」『此美はしき全構造 (structure)<sup>3)</sup>を眺むるに當つて喜悅と嘆賞の感と、これが完成の曉を待つ瞻望の情とを禁ずることが出来ない<sup>4)</sup>』併し此完成の曉は不幸にして到來せざるものである。吾人が現實の生活に直面し地上に於ける人類の眞の位置を考ふる時、此幸福と不死の華麗なる宮殿は、此眞理と徳の崇嚴なる殿堂は、恰も砂上の樓閣の如く消散する。マルサスによればゴッドウインの重大誤謬は文明社會に見らるゝ一切の罪惡と困窮とを人爲的制度に歸する所にある。若しゴッドウインの云ふ所が眞實であるならば、一切の害惡を世上より驅逐することも望まないことではなからう。『併し眞實は恚うである。人爲的制度は人類に對する多くの害惡の明白な顯著なる原因なるの觀はある<sup>6)</sup>、だがこれ等は、人間生活の源泉を腐敗せしめ、その全流を混濁せしむる根柢深き不純の原因と比較すれば、表面に浮ぶ單なる羽毛に過ぎないのである。』

ゴッドウインは云ふ『壓迫の精神、卑屈な精神、虚偽の精神等、此等のものは、確定的な財産制度の直接の生成物である。何れも皆智的及び道德的に有害なることは同じである。その他、嫉妬、惡意、復讐等の罪惡は、また之が離すべからざる相伴物である。然るに人々皆富裕の中に生活し、凡ての者等しく自然の恩恵を享樂する社會状態に於ては、かくの如き感情は當

- 1) 第二版以下の版にては『疑ひなく』が『一見して』 on a first view と改められた。
- 2) Essay, 1 st. ed., p. 174; 7 th. ed., p. 272
- 3) 第二版以下にては structure が picture と改めらる。
- 4) Essay, 1 st. ed., p. 175; 7 th. ed., p. 272
- 5) 第四版以後は人類 (Mankind) の代りに社會 (Society) とある。
- 6) 第四版以後は『又現に屢そうである』“and indeed often are” と附言さる。(4 th. ed., p. vol. II. p. 24)
- 7) 1. ed., p. 177; 第二版及第四版に於て此文句は逐次變化された。第七版にては『實はこれを自然の法則と人類の情慾より結果する根柢深き害惡の原因と比較すれば、輕微にして外面的の原因たるに過ぎない』とある。(7 th. ed., p. 272)

然に霧散するであらう……狹量な我利主義は消滅するであらう。……何人も自己の財物を防衛するの必要な、利己心は跡を断ち、全體の利益を眼中に置くに至るであらうと。——併しマルサスをして云はしむれば此描寫は幸福なる至上郷たるに異論はないが畢竟單なる空想であつて毫も事實に近き何物をも有しない。「人類は富裕の中に住むことは出来ない。凡ての者が等しく自然の恩恵を享樂することは出来ない。若しも何等確定的の財産制度がなかつたならば、各人は腕力を以て其僅少の所藏物を保護せざるを得ないであらう。我利主義が勝を制するであらう<sup>1)</sup>。ゴッドウィンは人口過剰による困難を遠き將來の事とし、未開墾の土地が全地球の四分の三なることを指摘する、併し地球が絶對的に生産し得なくなるまでに過剰人口により何等の困難が起らないと考へるのは誤謬である<sup>2)</sup>。」

併し今ゴッドウィンの美しき平等社會が實現したりとせよ。凡ての條件が人口の増加を助長するであらう。すなはち戦争もなく不健康な職業もなく、不健全な大都市への集合もなく、否、大都市それ自身すらなく、住民の大部分は散在的に存在する、清潔な家に住む。人々は皆平等であつて贅澤の爲の勞働はやまり、必要な農業勞働は全員に公平に分擔される。そして此產物は慾望に應じて社會の全員に偏破なく分配される。性の關係も自由の原理に立てられ、生れた子供には食料と扶助が自然に、その豊富な所から其不足せる所へと供給される。かくの如き人口増加を奨励する條件と、人口減少の一切の原因の除去によつて、人口は未だ如何なる社會にも見られない速さを以て増加すべきこと必然である<sup>3)</sup>。亞米利加の後部植民地の住民は十五年にして二倍す

1) Essay, 1 st. ed., p. 179; 7 th. ed., p. 273

2) Essay, 1 st. ed., p. 180; 7 th. ed., 273

3) Essay, 1 st. ed., pp. 181—185; 7 th. ed., p. 274.

ると云ふ。然らば此理想郷に於て人口が十五年間に二倍しないものと考へることは出来ないが、今假に讓歩して二十五年間に二倍するものとして考へて見る。假定による財産の平等化と農本主義とは生産物を著しく増加するの傾向あるは疑ない。併し些少なり土地の性質を知る者は此産額が二十五年間に現在の二倍になるもの考へることは出来ないであらう。併し今これを可能なりとし、二十五年の後二倍した人口千四百萬人を養ひ得たりと假定せよ。次の二十五年間に於ては増加せる人口を養ひ得べき食物を何處に見出し得るであらう。土地に關して少しでも知識を有する者は此二十五年間に最初の二十五年間に於けると同一額の産物増加が行はれ得ないことを承知するであらう。併しこのあり得べからざる増加が現に行はれたりと假定せよ。此假定を以てしても、第二の二十五年の後には七百萬人の人が食物を得ないであらう。二千百萬人をやつと支へるに足る食物が二千八百萬人に分割されねばならないであらう。果して然らば、富裕にして安樂なるゴッドウインの社會はどうなるであらう。『此美はしき空想の構造は峻嚴な眞理の一觸によつて消散する。富裕によつて養はれ強められた博愛の精神は冷い缺乏の氣息によつて抑へられる。一たび没したる呪はしき感情は再び其姿を現はして来る』<sup>2)</sup>ゴッドウインが惡の根源とする人爲的制度なく、公私の利益には何等の衝突なく、何等の利益の壟斷なく、不正な法律に憤激して秩序を犯す者もなく、萬人の胸には博愛の心が支配した此社會に、五十年の短期間に假に暴力と壓迫と虚偽と困窮と一切の厭ふべき罪惡と一切の窮迫とが、最も嚴肅な事情により、人間の一切の規定と全く離れたる人間本性に内在する法則により、醸成されて來たわけである。<sup>3)</sup>人爲的制度は自然の法

- 1) 第二版には此數字は二千二百萬と訂正される。従て以下の計算の數字も相應して改めらる。第六版に至つて、『千百萬人より二千二百萬』に増加せる人口と改められ、1800年の調査による數字なることが脚註さる。
- 2) Essay, 1 st. ed., pp. 185—190; 7 th. ed., pp. 273—276
- 3) Essay, 1 st. ed., p. 191; 7 th. ed., p. 276

則の必然にして避くべからざる結果たる困窮を加重する所か寧ろ著しく減ずる——これを除き去ることは出来ないが——傾向をもつたものではなからうか<sup>1)</sup>。

兎に角も事態の緊急は共同の安全の爲に或直接な方策を必要とする。缺乏を歎ずる人々の數は之を満足し得る人々の數と資力とを遙に超過する事が明となり、又緊要な慾望が國家の生産状態よりして到底全部の満足を得ざるが爲に、正義の侵害が盛に行はれ、此侵害が本となつて既に食物の増加が妨げられたること、若し之を何等かの方法で阻止するにあらざれば社會を擧げて混亂に陥らしむることがわかつて來るであらう。毎年の生産物増加だけは如何なる代償を拂つても圖らねばならない爲に、此第一の大目的を達するが爲には、土地をより以上に細分することが適切と見られ、各人の財産を有力な法令を以て保護することが機宜に適すると思はれて來るであらう。而して土地の豊度が増加し、又色々の出來事の結果として或者の土地が自己の慾望以上の産額を擧げることゝなれば、他方に於て不足せる人々は、此者の爲に勞働を提供する結果となるであらう。かくして、今日の文明國に行はるゝものと大差なき財産制度が社會を脅す害惡の最善（不十分なりと雖）救濟策として樹立さるゝに至ること、十分豫想され得る所である。次に又男女の關係に就ても自然に同様の變化が起つて來る。食物の増加は到底人口の増加と步調を共にし得ざるが爲に、或人口抑制の方法が必要であることがわかつて來る。而して最も自然的にして明白なる妨げは、各人をして自己の子供の養育に當らしむる事であると思はれて來る。此事が或點に於て人口増加に於ける、目安となり、指針となり、もし養育し得ざる子供を生みた

1) Essay, 1 st. ed., p. 194; 7 th. ed., p. 277

る時は、當然に之によつて生ずる不名譽と難澁とを自ら負擔する事が、他人の見せしめとして必要であると思はれて来る。「婚姻の制度、或は少なくとも各人に自己の子供を支持すべき明白の、或は暗黙の義務を課する制度が、吾人の想像したるが如き困難の下にある社會に於て、此種の推論の自然的結果であると思はれる。」<sup>1)</sup>

社會の二大法則たる財産の保護と婚姻の制度が一旦樹立されたる時は、條件の不平等は必然に隨伴して来る。「財産の分割が行はれたる後に出生したる人々は、既に所有されたる世界に生れ來たつた事になるであらう。若しも彼等の親が、家族の人員の多過ぎたる爲に、彼等を支持するに十分の食料を與へ得ないとすれば、一切のもの皆分有されたる此世界に於て彼等は果たして何事を爲し得るであらう……彼等は大いなる人生の賭博に白籤を引いた薄運者である……食物の缺乏を感じる凡ての者は、必要上、勞働を提供して、之と引換に生存の爲に絶對的に必要なる此品物を獲得しなければならぬであらう」土地所有者が、自己の消費以上に有する所の食物の總體が、勞働支持の爲に備へらるゝ基金である。此基金に對する需要が大なる時は、勢ひ其各分配額は少となる。勞働者の報酬は少なくなり、彼等は單なる生存の爲に勞働を提供することとなり、家族を養ふことは疾病と困窮とによつて妨げられる。現在知らるゝ凡ての國に於ける下層民間の幸福又は困窮の度合は、主として此基金の狀況にかゝるものである。而して人口の増加、靜止又は減少は、主として此幸福或は困窮の度合にかゝるのである。<sup>2)</sup>

マルサスは右の如く説き來つて、博愛を動因とする最も美はしき社會が避くべからざる自然の法則により、

1) Essay, 1 st., pp. 195—200; 7 th. ed., p. 277—8

2) Essay, 1 st. ed., pp. 203—6; 7 th. ed., pp. 279—80

今日と大差なき社會、すなはち有産者と勞働者の階級に分たれ、利己心を以て其大機構の主動力とする社會に墮落し去らざるを得ないことを示し得たとする。

マルサスはゴッドウインの社會が假に實現したとしても、人口法則の結果としてその必然的に崩壊すべきことを論じたのであるが、ゴッドウインの社會は理性の萬能を前提とするものなるが故に、その存続も亦理性の力によつて保障さるべしと云ふのがゴッドウインの考へでなければならぬ。故にマルサスがゴッドウインの社會を假定しながら、それが理性力の微力を意味する人口法則により崩壊するであらうと説けることは論理的行論としては間然する所ありと云はねばならない。兎に角マルサスのゴッドウイン批判は更に深く人性それ自身の見解に向けられねばならない。マルサスは人口論第一版に於てゴッドウインに對する、此點に於ける見解の相違を雄辯に説いてゐる。第二版以後に於ては若干の文章を残してその大部分が削除された、これ第二版の序文に彼が表明せるが如く、理想社會の批評よりも、人口法則の本質、過去及現在に於ける其作用と影響の研究に重點を置いたからである。一面に於てこの事はゴッドウイン、コンドルセー等の論者に對する自己の勝利が第一版に於て大體確立したることを信じた一證とも見られる。

併し兎に角も我々はゴッドウイン對マルサスの論争の理解の爲に此點に於けるマルサスの所論を聞かねばならない。

マルサスは二ツの公準を出發點とした。その一は食物は人類の生存に必須なりと云ふことであり、その二

は、性慾 (the passion between the sexes) は必然にして且つ殆ど現在の状態のまま變化なしと云ふことである。然るにマルサスは此第二公準に對してゴッドウィンが異論を有することを知つた。蓋しゴッドウィンは性慾は終に消滅すると考へたからである。故にマルサスの仕事は此反對論を駁することであらねばならぬ。

マルサスは先づゴッドウィンの主張するが如き性慾の消滅に至る何等の形跡なきことを指摘する。『世界あつて以來五千年或は六千年の間に性慾の消滅に至る何等の動きもなかつた』ではないか。若し人類は終に駄鳥と化すべしと主張するならば、その立論の證據として人類の頸は漸次延長しつゝあること、その口頭は益々硬化し且つ隆起しつゝあること、其足部は又日々變形しつゝあること、全身の毛は徐々に羽毛と化しつゝあることを示さねばならぬ。同様に性慾の消滅を豫想する者は性慾が漸次消滅に近づきつゝあることを示さねばならぬ。然るに性慾は二千年、四千年前と同様の強度を以て現存するではないか<sup>1)</sup>。

加之性慾は卑しむべきものではない、その感溺の排すべきことは凡ての享樂に於て同様であつて、『官能的、智的の如何なる享樂の追求に於ても、我々をして結果を考へしむる能力たる理性は適當なる矯正力であり指導者である。故に進んだ理性は常に官能的快樂の感溺を抑へる傾があるであらうことは考へ得るが、理性が此快樂を絶滅するであらうと云ふ結論にはならぬ。』偉大なる智的活動は人間に對する性慾の支配力を減すると假定するも、(反對を證する多くの例はあるが)、これが人口に影響する程に達する爲には、人類の大多數が現在の最も優秀なる者よりも向上することが必要である。『私は人類の大多數が其向上の終期に達したとは決して思

1) Essay, 1st. ed., pp. 10-13

はない、併し此論文の主要論旨は、如何なる國に於ても下層階級が、高度の智的向上に達するに足るほど、缺乏と勞働から解放さるゝに至ることの在りさうにないことを強調するに傾いてゐる。<sup>1)</sup>」

右の如きマルサスの論旨によつて我々は(一)ゴッドウインの形而上的思索に對比する經驗の尊重、(二)ゴッドウインの理性に對する慾情(Passion)の重視を看取し得る。後の點は——而して兩人の争點は結局この點の相異に歸する——更に他の章に於て敷衍される。

『ゴッドウイン氏は人を單に智的の生物として見ることに傾き過ぎてゐる。此誤謬——少なくとも私はこれを誤謬と見るのであるが——は彼の全卷を通貫し、彼の一切の推理に混入してゐる。人の意志的の行爲は彼等の意見に基づくかも知れないが、此等の意見は、理性力と肉體的諸傾向との複合物たる生物に於ては、完全に智的の生物と甚だ異つた修正を受けるであらう。<sup>2)</sup>』「凡ての意志的行爲には心の裁斷が先することは進んで之を認む、併し人の肉體的諸傾向が此等の裁斷に妨害力として甚だ有力に作用しないと云ふのは、本題に關し私が正説と思はざるを得ない説と奇妙に相反し、又すべての經驗に明白に矛盾してゐる……一ツの眞理は合理的生物としての或者の確信となり得るかも知れないが、複合的生物としてはこれと反對の行動を決することがあり得る。食慾、愛酒、美女を得たいと云ふ慾望は、その結果が致命的であることは、それを行ふ瞬間に於てすら、十分知り抜いてゐながら、人をして或行動に出でしむることがある。……複合的生物の裁斷は合理的生物の確信とは違つてゐる。<sup>3)</sup>」

1) Essay, 1 st. ed., 212—8

2) Essay, 1 st., p. 252

3) Essay, 1 st. ed., pp. 254—5

此等の節に於てマルサスはゴッドウインの假想する合理的生物に對して慾情により誘惑され勝ちの人間を描いてゐる。これは理智のみによつて行動しない人間である。従てゴッドウインの云ふ如く、眞理の說法によつて容易に行動を改め得ざる人間である。革命の方法として暴力を排し、議論と説得とを以て恰好手段としたゴッドウイン<sup>1)</sup>に對しマルサスは遙に現實的な人間を眺めてゐる。そして慾情を制御し得るゴッドウインの強き生物に對し、マルサスは弱き世上の人間を直視した。ゴッドウインの次の一節の如き、たゞこれは彼の理想社會の事ではあつても、マルサスの到底首肯し得ざる所である。——『合理的の人は今や、悅樂の爲に飲食をすることなく、飲食が我々の健康なる生存に必須なるが故にこれを爲すのみ。合理的の人は又、或種の官能的悅樂が此行爲に附隨せるが故に種 (Species) の繁殖を爲すことなく、種の繁殖を爲すことが正しきが故にこれを爲すであらう、そして彼等が此機能を果す方法は理性と義務の指令によつて律せらるゝであらう。』<sup>2)</sup>

理性の萬能を信するゴッドウインは亦人性の淨化向上につき極度の樂觀論者である。『人の罪惡と道德的缺陷は克服し得ざるものでない。人は完全化し得るものである、換言すれば永續的に向上し得るものである。』<sup>3)</sup>——これに對してマルサスは云ふ『人の罪惡と道德的缺陷は大體に於て克服し得ざるものである。』<sup>4)</sup>それは、人類の大部分は確定的にして不易なる自然の法則により、慾情殊に缺乏より生ずる惡の誘惑に絶えず曝されてゐるからである。それは政治的或は社會的制度の如何を問はない。<sup>4)</sup>人類が其向上の終期に到達したとは勿論云へないが、向上の限界がわからないことは、向上が無限であると云ふことゝ同義ではない。<sup>5)</sup>コンドルセーに對

- 1) Political Justice, I st. ed., p. 202
- 2) Political Justice, p. 852
- 3) Essay, I st. ed., p. 271
- 4) Essay, I st. ed., p. 267
- 5) Essay, I st. ed., p. 272

しても彼は繰り返して此兩者の區別を説いてゐる。<sup>1)</sup>

ゴッドウインに對するマルサスの立場、その攻撃の要點は右述によつて最早明かであらう。これはマルサスが人口論初版に於てゴッドウインに應對したる所を略述したのであるが、その前半はその後の諸版を通じて保存せられ、削除されたる部分も彼の思想の變化を意味したと解さるべき理由はない。ゴッドウインに對する論難の根本的立場は論争全體を通じて變つてはゐない。<sup>(註)</sup>

(註) 私はこゝで南亮三郎教授が筆者の舊著『マルサス人口論の研究』(昭和三年)を批評されたる際(國民經濟雜誌第四六卷第五號)の一見解に對し簡單に答へないわけに行かない。——教授は曰く『理性の完全化を中心としてのゴッドウイン對マルサスの論争は『人口論第一版をもつて終つた答である。即ち道徳的批判を認むるに至つたその第二版に於ては、もはや理性の完全化は主問題とならず、否な或る意味に於てマルサスはゴッドウイン説の信奉者となつたとさへ云ひ得よう。然し注意すべきことには、これと同時に、ゴッドウインの平等社會論に對するマルサスの論駁は第一版に於けるとは全く異なる論據より行はるゝに至つた。即ちマルサスは、彼れ以前にロバート・ウォレス及びジョセフ・タウンゼントの既に試みたる如く、道徳的抑制なるものは私有財産制度の確立に依つて初めて維持され得るものなるが故に、平等共產主義的社會組織はその根柢を奪ふと云ふ意味に於て必然に崩壞せざるを得ずと論ずるを得たのであつて、そは夙に、エドキン・キャナンの指摘せるところの如くである』と。同一趣旨の説は既に教授の論文『共產社會と人口制限』(國民經濟雜誌第四三卷第六號)にも述べられてゐる。併し私はマルサスのゴッドウインに對する批評の立場は南教授の云はるゝが如き變化を運ず、兩人の論争は結局人性に關する見解の相異に基いてゐると考へざるを得ない。南教授は第二版に於ては、マルサスはゴッドウイン論駁の態度を一變して、道徳的抑制なるものは私有財産制度の確立に依つて初めて維

1) Essay, I st., p. 170

持され得ると云ふ論據に立つに至つたと主張されるのであるが、私見にすれば、このマルサスの論據は既に第一版に於ても存在してゐる。すなはち彼は、ゴッドウィンの社會が實現したと假定して曰く『私は全體として人口の増加にこれ程有利な社會形態を考へ得ない。今日の制度の如く婚姻が束縛的なこと (Irremediableness of marriage) は疑ひなく多くの者をして結婚の状態に入ることゝ妨げてゐる。反對に自由な交際は早くから男女を結縁せしむる最も有力な奨励となるであらう、更に我々は子供の將來の養育に關する心配はないものと假定してゐるから、私は二十三歳の婦人百人中家族をもたないものが一人でもあるとは考へ得ない』(I. st. ed., p. 184) 更に彼は平等社會に於ける人口増加の異常なる結果として、ゴッドウィンの財産共有、婦人共有の制度は漸次に今日の財産及婚姻の制度に變化し行くべきことを述べたが(前述) 此際にも彼は『食物の増加は到底遙に迅速なる人口の増加と歩調を保たざること、従て人口に對する或妨げが緊急に要求せらるゝこと、而て最も自然的にして明白なる妨げは、各人をして自己の子供の養育に當らしむること、これは或點に於て人口増加に於ける目安となり指針となること、而て養育の資料を見出し得ざる子供を生むことは望まれないが故に、若しこれを敢てした場合にはかゝる行爲に伴ふ不名譽と難澁とが、かくして自己及び罪なき子供を無分別にも困窮に陥れた其個人に見舞ふことが他人の見せしめの爲に必要であると云ふこと』(I. st. ed., pp. 199—200; 7th ed., 275) を云つてゐる。すなはち彼は私有財産制度及びこれと不可離の關係にある婚姻制度が人口の異常なる増加を抑へる爲に必要となることを云ふのである。道徳的抑制と云ふ言葉は此思想を表面にあらはさざる第一版に於いて勿論彼は用ひないが、私有財産制度が結婚及早婚を抑制し以て人口増加による社會の混亂を防ぐ爲に必要なりと云ふ論據は既に見出され、而て第二版以下にも保持される。蓋しマルサスが若し道徳的なる(即ち性的罪惡を伴はざる) 獨身生活は私有財産制度の上に於てのみ行はれ得ると云ふのならばかゝる議論は第一版に見出され得る筈はないが、マルサスは單に結婚又は早婚の回避が私有財産制度を前提とすると云ふ趣旨を云つてゐるに過ぎないが故に、第一版に於て豫防的抑

制を認めたる彼が、右の如き論據を以てゴッドウィンに迫れることは毫も不思議でない。

第二版に於てゴッドウィンに對するマルサスの論據は變化しなかつたとすれば、變化したものは何であるか。單にマルサスの攻撃力が減じたと言ふ變化であると私は思ふ。第一版に於てもマルサスは理性力を認めてゐることは勿論であり、更に、『官能的、智的の如何なる享樂の追求に於ても、我々をして結果を考へしむる能力たる理性は適當なる矯正力であり、指導者である』(1st. ed., pp. 215—6)との一句の如きは道徳的抑制すら彼の念頭に浮んだらうことを思はしめる。併し兎に角第二版に於て初めて彼は道徳的抑制に或程度の重要を認めたのである。これによつて彼はゴッドウィンに一步近づいたことよなつた。併しなほ兩人の間の對立は、兩人の人性に對する見解の相異により成立し得た。この點は後述する所である。

#### 四 論争の進展

時代の寵兒ゴッドウィンに對し無名の人マルサスが匿名を以て其立場を明にして(一七九八年)間もなく兩人は一七九八年八月の或日倫敦にて相會し、また其後幾莫もなくゴッドウィンはマルサスに出書し、マルサスはこれに對して答へる所があつた。ケガン・ポールの『ゴッドウィン傳』<sup>1)</sup>には此マルサスの返書が採録される。不幸にして我々はゴッドウィンの書翰を見るを得ないが、マルサスの返書はよつて推測するに『政治的正義』の著者は再び其立場を親しく敷衍する所があつたものと思はれる。殊に平等社會に於て用心の念(Prudence)が人口の過剰を抑止する作用を爲すべきこと、並に今日の社會に於て農業の擴張が私有財産の結果として妨げら

1) C. Kegan Paul, William Godwin, 1876. vol. I. pp. 321—5; 此の書翰は Bonar 編マルサス人口論第一版の復刻版 (First Essay on Population) に轉載されてゐる。

れ<sup>1)</sup>従て人口の増加が不當に抑えられてゐることを説いたものと推せられる。この二點に對しマルサスは次の如く答へる。

「貴方が人口に對する妨げとする用心の念は困難の豫見を意味する、而して此困難の豫見は殆ど必然的に此困難を除きたいと云ふ願望を意味する。然らばかゝる困難を除きたいと云ふ自然にして一般的なる願望は競争を引き起して其結果は社會の必要労働の平等的分配の一切の機會を破壊し、以て私の前に述べた様な状態を現出するに至ることのないと云ふ十分な理由を貴方は擧げ得るか」

「現在の社會形態が最大の實際的人口を妨げると云ふ理由でこれに反對する貴方の意見は或程度、貴方の用心の主義に對する反對意見ともならう。貴方の此主義の目的は、私の考ふる所では、人口を常に食料の範圍内の可也内側に維持して置くことであらう。然るにかゝる主義が廣く行はれて、食物の量を絶えず増加するの要を除きたる程になるとすれば、耕作は今日よりもなほ遙に徐々にしか行はれないと云ふ虞が大いにある。」

「用心の必要が、過剰人口よりの困窮を避くる爲に容認さるゝこと自體は、公けの制度に嫁せられた批難を個人の行爲に移すものである。」

かゝる私的交渉を経て兩人の論争は再び公の舞臺に出た。それは一八〇一年發行のゴッドウインの小冊子<sup>2)</sup>に於てである。

此冊子は其表題の示すが如くゴッドウインの思想に對する批評家、特にパー、マッキントッシュ及びマルサ

- 1) Godwin, Political Justice, 1 st. ed., p. 816 参照
- 2) W. Godwin, Thoughts occasioned by the perusal of Dr. Parr's Spital Sermons, being a reply to the attacks of Dr. Parr, Mr. Mackintosh, the author of an Essay on Population, and others. 1801

スに答ふるものであつて、パーは其年に公刊したる一書 (A Spital Sermons, preached at Christ Church, upon Easter Tuesday, April 15, 1800. London 1801) に於てゴッドウインの "universal philanthropy" を排斥したのである。(尤も彼は明にゴッドウインの名を擧げず、そのノートに於てゴッドウインの著書から引用してゐる) マッキントッシュに至つては、ゴッドウイン自ら倫敦 Lincoln's Inn Hall に於けるマッキントッシュの講演を聞くこと兩三回、自己に對する攻撃とおぼしきものゝ連發さるゝに僻易し、その後の聽講を斷念したと云ふ経緯がある。(これは此書にゴッドウイン自身の語る所、p. 16)

此書に於てゴッドウインはパー、マッキントッシュ兩人に對し激しき論鋒を向けながら、マルサスに對しては寧ろ穩かなる取扱を爲し、その冒頭に於ては極度の讚辭をすら呈してゐる。これは二十年後に於けるゴッドウインの感情的なる論調と對照して興味あることである。

「私は偽りなき賞讃と尊敬の念を以て人口論の著者に接近する……彼の議論の大體の調子は彼の心胸の寛大に最大の名譽を與ふるものである。彼は私及び私の主義に憎悪心を惹き起さうとすることなく、又侮辱を加へようとするものでもない。彼は恰も此問題が未だ曾て政黨の題目や黨派の術策の題目となつたことはないかの如く内輪に事を論じた。彼は恰も證據の研究と眞理の開發以外に何等の目的もないかの如く議論した。」<sup>1)</sup>

「此著者は恐らくより高く私の尊敬を要求する。少しも銜はさる淡白な筆法を以て、あらゆる學問の虚飾を斥けて彼は經濟學に對し過去百年に於ける如何なる著者にも劣らざる明白疑なき貢獻をなしたと私は思ふ。彼の

1) Thoughts occasioned etc., p. 55

著書の大提言と梗概は、その嶄新なると同時に決定的なるを見るべしと私は信ずる。私自身に於ては、私の著書が斯の如き貴重なる論文を産出する機会を與へ、刺戟を供給した點に於て或誇りを感じないわけに行かない<sup>1)</sup>。かくの如くマルサスに對する讚辭を以て始めたゴッドウインは人口法則に對しても明に承服の態度をとる。これ彼が人口法則の中核とも見るべき算術級數、幾何級數の説を認めたことによつて明である。「本著者の勞作の基礎たる人口と食料の増加率を私は攻撃の餘地なきものとして、經濟學に對する貴重なる一貢獻と見る<sup>2)</sup>」。然らば兩人の論争は如何なる點に存し得たか。ゴッドウインはマルサスの理論の基礎に迫らんとせず、たゞ其結論に對して同意し難いものがあるとした。特に人口増加を抑制する所の妨げをマルサスが罪惡と困窮との二つに歸したことに對して、ゴッドウインはなほ此外に「用心」の作用あり、罪惡及困窮はマルサスの考ふるが如く大にあらず、英國に於て現に此用心の念によつて結婚は著しく抑へられてゐる (p. 76) となし、況んや彼の理想社會に於ては、此念慮は更に廣く作用するであらうと主張したのである。マルサスが人口論 (第一版) に於て「豫防的抑制は殆んど必然的に——たとひ絶對的ではなくとも——罪惡を生む」と云へるに對し、ゴッドウインは罪惡とならざる豫防的抑制の存在し、且つこれが有力に作用することを云つたわけである。これは既に前に述べたる書翰に於てゴッドウインがマルサスに對し指摘したる (少くとも然く推定さるゝ) 所であつて、これが動機となつて人口論第二版に於て道徳的抑制なるものゝ存在をマルサスは明白に容認するに至つたと云はるゝ。

1) Thoughts occasioned etc., p. 56

2) ibid., p. 76

かく見ればマルサスとゴッドウィンとは今や主要點に於て完全に一致し、兩者は永久に握手したかの如く感ぜらるゝ。併し此一致は謂はば表面的に過ぎない。立ち入つて云へば、ゴッドウィンがマルサスの算術級數、幾何級數の說に賛同すと云へるも、果して此賛同が十分なる理論的検討を経たる結果なるや大いに疑の餘地がある。少くともゴッドウィンは人口及食物の増加率の相違より生ずる害惡をマルサスの考ふる如く差迫つたるものにあらずとなしてゐるが(p. 70)、これは兩増加率の承認と矛盾するものではなからうか。併し今これ以上此點を追及せず、マルサスの側に於ける讓歩、即ち道徳的抑制の容認が何を意味するかを考へて見る。

道徳的抑制を認むることは理性力の作用を明白に認むることである。この限りに於てそれはゴッドウィンへの讓歩である。併し(一)マルサスに於て此場合理性は利己心に基てのみ作用し得るが、ゴッドウィンの理性は本來何等利己的ならざる人性に備はる能力であり、外界の印象を受けて自由に開展し得る。(二)マルサスは理性(從て道徳的抑制)に調節的作用を認むるのみ、これに實際上大いなる期待を掛けない。ゴッドウィンに於て理性は萬能である。

この二つの差異に從て(一)マルサスによれば結婚又は早婚の回避、從て又道徳的抑制は今日の私有財産と家族制度を認むる社會に於てこそ或程度行はれ得るが、ゴッドウィンの考ふる如き社會に於ては其作用は減ずる。(二)今日の社會に於てもマルサスは道徳的抑制に大なる期待を掛けざるが故に、人口法則の結果、困窮と罪惡が生ずると云ふ彼の說は覆されない。

第一の點に於ける對立は、ゴツドウィン、マルサスの次の如き論戰によつて明である。

ゴツドウィンは云ふ「吾人は、現在住む社會に於て、人口増加に對する大きな能動的抑制の一は道德、用心、又は誇りより生ずることを知つた。道德、用心、及び尊ぶべき誇りは、現在に於けるよりも、斯の如き社會狀態（筆者註—ゴツドウィンの社會）に於て少なくなるであらうか。成程家族の多いと云ふことの惡結果は、各人の個人的利益に、今日の如く赤裸々に訴へては來ないであらう。又かくの如き社會狀態に於て、或は、自分の費用では子供の養育は出來ないから、隣りの人の費用で生活させようと云ふ者があるのも眞理である。併しかくの如き地位にあつて、かくの如く考へることは人の性情に合致したことはない。人が赤貧と無理算段の生活より益々向上すればする程、彼等の行動は益々慎重となり、彼等の氣質は眞面目となるであらう。各人皆性格を有する場合に於ては、何人も我儘な不謹慎を以て他人の注意を惹く事を欲しないであらう。人が快樂と幸福の凡ての合理的手段を有する場合に於ては、何も周章て、無謀な耽溺を敢てし、自己及び他人の安靜を破る事はないであらう。又今吾人が考慮を費しつゝある如き社會狀態に於ては、今吾人が論じつゝある如き誤謬に、不注意の爲、陥るが如きは不可能であらう。人口論の學説は、若し之が眞理であるならば——而て私は之が眞理たるを疑はないが——十分に理解するゝであらう。社會は今日の如き階級（*classes*）に陥ることはないし、又、その組織の複雑性によつて煩はされ、錯綜することもないであらう。各人をして、その前面及び四隣に廣大なる進路を見出さしめ得る程の規則正しさと、衡平とが支配するであらう。」<sup>1)</sup>

1) Thoughts occasioned etc., pp. 73-4

これに對しマルサスは人口論第二版に於て答へて云ふ「早婚の傾向は甚だ強烈であつて、之を抑止するには、吾人の求め得るあらゆる助を必要とする程である。従て、何等かの方法で私有財産の根柢を弱め、各人がその用心によつて得べき完全なる利益と優越とを何等かの程度減ずるの傾向あるシステムは、愛の慾情に對する、實質的影響を期待し得べき唯一の抑止的重量を取り去ることにならざるを得ない。ゴッドウィン氏は、そのシステムに於て『家族の多いことの悪結果は、各人の個人的利益に、今日の如く赤裸々に訴へて來ないであらう』と認めてゐる。」ところが私は生憎、從來人の性情に就て知つてゐる所によれば、ゴッドウィン氏の斥くる此個人的利益に對する赤裸々な訴へがなくしては、吾人は到底合理的な成功の望を持ち得ないと云はざるを得ない。萬事が單に義務の精神に俟つべきものであるならば、之と抗爭すべき有力な反對者を考慮する時、この場合、私は全く失望せざるを得ないと自白する<sup>1)</sup>」

マルサスの此答辯は人口論第五版以後に於ては削除されたが、平等共産の社會に於て道德的抑制（一般に結婚又は早婚の回避）の行はるべき動機が破壊されると云ふ論點は最後まで保持されてゐる<sup>2)</sup>。

第二の點。若しマルサスが今日の社會に於て道德的抑制の作用に大いに期待し、これを議論の前景に置いたとすれば、人類社會の困窮と罪惡を主として人口法則なる『自然的法則』の作用に歸せんとする彼の根本精神は失はれる。加之、彼の人口法則は性慾の強大不易性より出發する。故に若し理性の力が此性慾を十分に抑へて人口の上に影響を與へ得る程強大なりとすれば、性慾の強大不易性自體が否定され、人口法則も否定さるゝ

1) Essay, 2nd. ed., pp. 385—6

2) Essay, 5th. ed., vol. II. P. 282; 7th. ed., p. 285

こととなる。<sup>(註)</sup>——然るにマルサスは實際に於て道德的抑制の作用に大なる望を囑してゐない。此點に關する異論(例へばデーチェル<sup>1)</sup>)はあるが私は、道德的抑制に關するマルサスの數章を通讀して此異論に同じ得ない。(此點私は他の機會に於て詳論したいと思ふ)マルサスはゴッドウィンに對して悲觀論者である。道德的抑制の容認は此色彩を改むる所大ではない。<sup>2)</sup>ゴッドウィンが社會の害惡を社會制度に歸するに對しマルサスは人類の本性に出發する或『自然的法則』に其責を歸すること依然として變はらない。

(註) 拙著に於て私が『若し彼—マルサス—が道德的抑制の實行を容易なものと思はんとするならば、彼は性慾の不易を否認しなくてはならない。併し是は人口法則の撤回を意味する。』と云へるに對し南教授は『道德的抑制の遂行は毫末も性慾の不易を否認せず、その遂行の難易は人口法則の樹立そのものと些かも關せざるものである』と教へられた。(國民經濟雜誌第四六卷第五號一四七頁)併し私は性慾が容易に抑制され得る事を認むるのはそれだけ性慾の弱さを認むることになると考へる。或力の衝擊に容易に抵抗し得ると云ふことは其力の弱さを云ふことではなからうか。容易に抵抗され得る強大なる力と云ふことは矛盾ではなからうか。人口法則は性慾の強大不易より出發すると見る私は(拙著マルサス人口論の研究二二頁)此考から、道德的抑制の實行を容易とする事は結局人口法則の否認となると云はざるを得ないのである。

右の二點を通じてマルサス、ゴッドウィンの對立は結局人性に對する根本見解の相異に歸着すること敢て再説を要しないであらう。而して兩人の論争は此對立を残したまゝ終幕に達して然るべきものであつたのである。事實、マルサス側は其注意を漸次ゴッドウィンの平等社會より遠ざけて行つた。前述の如く彼は其第一版

1) H. Dietzel, Der Streit um Malthus' Lehre, in Festgabe f. A. Wagner.  
2) 拙著、マルサス人口論の研究 219 頁以下参照 (1905, S. 45)

に於て主たる注意をゴッドウィンに向け、第二版に於て著しくこれより離れ、第五版に於てたゞ一章をゴッドウィンの爲に残すに過ぎなかつたのである。

然るにゴッドウィンは異なり、マルサスの盛名が目を追うて高きに反し、曾ての寵兒今や世の忘却の中に顛落し行く自己の姿を眺めて焦慮の念に堪へざりしが、一八一八年古き論敵マルサスに對して最後の突撃を試むべく決心し、孜孜として想を鍊り論を固めて一八二〇年十一月一駁論を發表した。題して「人口に就て。人類の數の増加力に關する研究、本題に關するマルサス氏の論文への一答辯」と云ふ<sup>1)</sup>。彼の傳記者の語る所によれば、數多き彼の論著の中恐らく「政治的正義」を除いて彼の心魂をかくの如く打ち込んだものはなく、その當時の日誌は一日として幾頁かを之が爲に書き又は書き換へたる記録をとどめざるはなしと云ふ<sup>3)</sup>。彼自身此勞作には大いなる希望を掛け、單にマルサスの救濟策、彼の罪惡と困窮の論を攻撃するのみならず、何等救濟策の要なきこと、人口はマルサスの云ふが如き異常なる増加を遂ぐるものにあらざることを示さんとしたものである<sup>4)</sup>。

併し此努力と希望にも拘らずゴッドウィンの「人口論」は頽齡の產物であり混亂と矛盾の堆積に過ぎなかつた。そこには曾て若人を惹きつけたる「政治的正義」の著者の情熱も論理の透徹もなく、高名の星座にある古き論敵に對して徒に怒號する老哲人の衰へた姿あるのみである<sup>5)</sup>。

ゴッドウィンは文明國の各人は自己の生活に必要なる以上の生産を爲す力ありと云ふ法則を以て人類

- 1) 此焦慮は自著 (Of Population) 序文に明瞭に語られてゐる。
- 2) Of Population. An Enquiry concerning the Power of Increase in the Numbers of Mankind being an Answer to Mr. Malthus' Essay on that Subject. London 1820
- 3) K. Paul, William Godwin, vol. II. p. 259
- 4) Mrs. Shelley に與へる書, K. Paul, William Godwin. vol. II. p. 271
- 5) Godwin 自身此書には「政治的正義」の著者の美はしき幻想なしと云つてゐる。(Of Population, Preface X)

及び社會に關する最も確實なる法則とし、人口の壓迫が絶えず人類を苦しましむと云ふマルサスの説を以て最も明白なる誤謬と斷ずる。(p. 11)而して或國(ポーランド、南亞米利加、西班牙領亞米利加)に於ける人口の稀薄は人類が出生によつて増加し能はざる決定的の證據であると指摘する。次に彼はマルサスの云ふ如く二十五年にして人口が二倍せんが爲には、一組の結婚に對し八人の子供を必要とすと計算して以てマルサスの背理を論證せんとする(p. 28—9)此計算の根柢にあるものは出生者の半數は成年に達せずして死亡すると云ふ推定であつて従てマルサスに云はしむれば、かなりの程度の抑制原因(罪惡と困窮)の作用を豫想せるものである。

轉じて亞米利加に於ける人口増加に關しゴッドウインは或信頼し得ない數字(Niles's Register 及び Cobbet's Weekly Register)によつて、彼の地の人口増加が主として移住民の流入によることを主張せんとする。(pp. 413—4)又瑞典の人口統計を基礎として彼の國の人口が遅々たることを述べ、瑞典の狀態が最も人口増加に有利なりとして、之を一般に當嵌めんとする。(pp. 151—2)其他ゴッドウインはマルサスを以て低賃銀の主張者とし、又困窮と罪惡を人口過剰の救濟手段として推奨する者と見て、これに攻撃を加へてゐる。(pp. 598, 523)

要するに全卷、マルサス説の誤解又は曲解の上に立つ人口法則の否定であつて、二十年前のゴッドウインとは云はば別人の著作である。その一々の説を批判的に取扱ふことを私は今不要と思ふ。附録として載せたる友人ブースの一論<sup>1)</sup>もゴッドウインの立論を擁護するに足らず、如何なる論著も誰人かを服せしむるに足る世の通例として若干の人々を喜ばしめたる外<sup>2)</sup>、有力なる批判の前にゴッドウインは没落するのみであつた。恰も彼は

- 1) David Booth, Dissertations on the ratio of increase in population, and in the means of subsistence.
- 2) 例へば K. Paul, William Godwin, vol. II. pp. 272—3 を見よ。

金銭的窮迫の結果破産するに至つたが、思想的にも亦破産する外はなかつたのである。

ゴッドウインの挑戦にマルサスは應ぜず、反駁を要せざるものとして簡単に片付けたが、エヂンバラ・リビユー誌の一評論（この筆者はマルサスにあらずやとの疑が或人々によつてもたれた。併し不明である<sup>1)</sup>、及びフランシス・ブレースが最も強き論駁を加へた<sup>2)</sup>。その最初の出現以來最上の頭腦を支配して行つたマルサス思想の進軍の上に此等の論駁は役立つたとは云へ、ゴッドウイン『人口論』はマルサス對ゴッドウインの論争の中からは寧ろ削除されて然るべきものである。曾ての『政治的正義』の著者の立場からマルサスに對する所は殆どなく、マルサスと同じ實證的方法を用ひて前には認めたる人口法則を否認せるものである。故にこゝには新たなる人口論争が開かれたと云へば云へる。併し此『人口論』それ自身前述によつても知らるゝ如く、マルサスの答辯に値ひせざる程微力なるものであつた。寧ろそれは『論争』の感情的延長としての産物とも見得べきものである。

時代はマルサス側に軍配をあげた。マルサスの思想が時代を征服した原因に關しては他の人々によつて語らるゝであらう。私はマルサス對ゴッドウインの論争が時代によつて裁決せられ（マルサスの生前人口論は六版を重ねた）、ゴッドウインは世に忘れられて不遇の晩年を終つた（一八三六年）ことをしるせば足る。

## 五 論争の歴史的意義

- 1) Malthus, Essay 6 th. ed., Appendix
- 2) Letters of Ricardo to Malthus, by Bonar. p. 206 参照
- 3) F, Place, Illustration and Proofs of the Principle of Population. 1822

スミスの富國論（一七七六年）は産業革命の前晩の産物であつて、そこには私有財産と自由競争の基礎の上に於ける財の生産と交換とが主として論ぜられた。併し時代の進展はスミスの著書になほ説かれざる、或は十分なる注意を受けざる問題の存在を教へて來た。それは富の分配をめぐる諸多の問題である。一たび此問題に注意を向くる論者の中には自然にスミスの思想により支配さるゝ現行制度の根柢の正さに疑を持つものゝ發生を見た。Thomas Spence (1750—1814), William Ogilvie (1736—1813), Thomas Paine (1737—1801) の三農制改革論者に次いで Charles Hall, R. Owen 其他の論客は何れも之に屬し、ゴッドウィン又佛蘭西革命の實際的刺戟に應じて立つた此一黨（尤も其内容に於て種々雜多なる）の一將帥に外ならなかつた。勿論これ等の論者はトマス・モアの如きとは異なり何れも十八世紀思想の洗禮を受けたる新人であつた。すなはち彼等の立つた共通の地盤はジョン・ロックの *On Civil Government* に於ける自然法思想であつた。彼等はロックの中から土地の原始的共有の思想と労働こそ財産の眞の権利者とする思想を引き出した。更に現行制度の代辯者と見ゆるスミスまでが、富の源泉又は價值の尺度としての労働を重視したる事は彼等の信念を固むるの力があつた。

此等のユートピアンには、勿論現行社會制度の最善を信じこれを擁護する一般的傾向をもつ論者が對抗した。マルサスは此一派の雄であり、從て情熱的なる反資本主義的傾向の人々が彼を以て資本主義の辯護者として遇することは、やむを得ない（彼の關心が一階級の利益擁護に存しなかつたことは十分に強調すべきであるが）。誠にゴッドウィンに對するマルサスの勝利（こゝに勝利と云ふは其思想が時代を捉へこれを動かすに至

つたことを云ふ)は自由主義經濟學の堅壘に更に一壘を加へ、十九世紀前半に於けるその黄金時代の建設に重大寄與をなしたことを意味する。

而してゴッドウインの社會改造による華々しき夢想を冷酷なる人口法則によつて封じたることは、凡ての社會改造案に對し「躓きの石」を置いたことであつて、その後の社會改造論者は此人口法則を原理的に否定するか或は實際的に其最惡の作用を避くるか(産兒制限)、一途何れかを選ぶ外なきに至つた源はこゝに發する。

マルサスの勝利は人類の前途に懸けられた麗はしき希望をばはかなき一個の幻想と化した。それは樂觀說に對する悲觀說の勝利である。併しマルサスは單にゴッドウインを克服したのみならず同時にアダム・スミスをも克服した。經濟生活を支配する自然法則的なるものゝ存在を信ずる點に於てマルサスはスミスの學徒であるが、社會に存する現實の害惡よりその研究を進めたるマルサスは個人的利益と全體の利益との不思議なる調和の如き神祕說に賛同することを得ず、却て社會の害惡をも「自然的法則」によつて説明したるが爲に、スミスの形而上的なる自然調和の樂觀說はマルサスに於ては經濟的宿命論の悲觀說に轉換せしめられた。生産力の増進と社會の進歩を説くスミスに對比してマルサスは土地生産力の有限(報酬漸減の法則)を力説し貧乏の不可避を説いた。マルサスの此悲觀的傾向はリカアド・ミルによつて踏襲され、労働階級の困窮の宿命を根據として労働立法へ原則的反對をした多くの政治家、實際家によつて唱和された。自然賃銀說(賃銀鐵則)、賃銀基金說は此傾向の代表的學說である。ミルが後年賃銀基金說を拋棄したるは新樂觀的傾向への轉向を意味する。

ゴッドウィンに對するマルサスの勝利は又「形而上學」に對する「經驗」の勝利である。スミスは自然的調和の形而上學的思想を根柢とした。彼はこれと矛盾せる世上の事實に眼を閉ざしたものではなかつたが、經驗によつて形而上學を斥けることも、又此兩者を何等かの統一體に纏むることも出来なかつた<sup>1)</sup>。然るにスミス以後の實際界の事實は個人的利益と全體の利益の神祕的なる自然調和の説を打破するに十分であつた。此變化は形而上學それ自體の排斥に向ふか、或は別個の形而上學的體系を立つるか、何れかの道を暗示した。前の道を履む者がマルサスであり、後の道を行くものがゴッドウィンであつた。

尤もマルサスは一個の過渡的現象である。彼は一方に於てベンタムの非形而上學的功利主義をとりながら、他方に於て基督教的形而上學の束縛を脱してゐない。併しながらスミスに於て形而上學が思想の核心を成せるとは異なり、マルサスに於て形而上學は經驗的事實の論證として役立つに過ぎない。彼によれば人類の幸福又は功利にこそ造物主の意志は存するのであるが、この幸福又は功利に合致するや否やは經驗の教ふる所に外ならないからである。彼は道徳的抑制を説く章に於て人の慾情の追求が造物主の意志に合致するやは、之が經驗的に人類の幸福を増加せしむるや否やにかゝることを述べてゐる。「動物として、或は吾人が此等の慾情の結果を知らない前に於て、吾人の唯一の仕事は此等の自然の命令に従ふことである。併し理性的生物として吾人は此等の結果に注意すべき重大な責務の下にある。而して若し是が吾人或は他人にとり惡であるならば、吾人は正に、之を、此の如き慾情の満足方法が、吾人の状態に適しない、或は神の意志に合致しないと云ふ表示であ

1) G. Briefs, Untersuchungen zur klassischen Nationalökonomie, 1915, SS. 213 ff.

ると見ることが出来る。従て道徳的生物として、此等特殊の方面に於ける慾情の耽溺を抑制するのは明に吾人の義務である。又かくの如く吾人の自然的慾情の結果を精査し、屢々之を功利の試金石 *The Test of utility* にあて、漸次に、慾情の満足を、悪を伴はず、従て明白に人類の幸福の量を増加せしめ、造物主の明瞭な目的を満たす様な方面にのみ、圖るの習慣を獲得するのは吾人の義務である<sup>1)</sup>と。マルサスにとりてあらゆる認識の根源は経験である。「経験は 凡ての知識の眞の源泉であり、基礎である<sup>2)</sup>」「事實と経験により発見されたる眞理の殿堂の前には最も華麗なる學説も、最も美はしき分類も没落しなければならぬ<sup>3)</sup>」「如何なる説も一般的経験と矛盾するものは、正説として採らるべき何等の自負をもち得ない<sup>4)</sup>」

ゴッドウィンにも時代精神としての功利主義は歴々として指摘される。「政治的正義」の巻頭に於て云へる、學問の目的は人類の幸福であると云ふ思想はベンタムと同一思想であり、又社會は單なる個人の合計となる思想に於ても後者と一致する。併しゴッドウィンは形而上學者であり、その全傾向に於て経験を超越し、歴史を蔑視した。ヘルドは、ゴッドウィンを以て英國に未だ曾て見ざる抽象的教義を展開したとなしてゐる<sup>5)</sup>。まことに彼は如何なる形而上學者にも劣らざる空理的頭腦である<sup>6)</sup>。

マルサスはスミスより離れ、同時に形而上學の一形態としてのゴッドウィンを排し得たことによつて經濟學は新しき進路の上に置かれた。以後の經濟學は一切の形而上學、従てスミスの自然法觀念よりも脱離したるベンタムの思想によつて支配された。リカアドウよりミルに至る學統に於て、個人の利益は神の導

1) Malthus, Essay, 7th ed., p. 442

2) Malthus, Essay, 1st ed., p. 17

3) Malthus, Principles of Political Economy, 1820, p. 7

4) Malthus, Principles of Political Economy, 1820, p. 10

5) A. Held, Zwei Bücher zur sociolen Geschichte Englands. 1881, S. 90

6) Sir L. Stephen, English Thought in the Eighteenth Century. 1927, vol. II. pp. 266—7 参照

きにより全體の利益と合致するにあらずして、社會は個人の合計なるが故に此結果に到達すると考へられた。自由主義經濟學に於ける此變化は注意を要する。

最後に、ゴッドウィン對マルサスの論争は經濟學の視野を擴大する一轉機ともなつた。レスリー・スチブンは云ふ『此論争一たび開くるや、經濟學は最早分離した學問と見得ないことが明となつた。その學説は當時の一切の政治的社會的大問題に参加した。その方法の如何を問はず、又産業組織が論理的構造によつて他の問題と引離して取扱ひ得るや否やを問はず、經濟學が廣き思索と共通の分野を有することは明となつた。以來經濟學は分離した一研究としてでなく、社會學的理論の一部門として見られねばならないのである。かくて私は政治學の歴史に於けると同じく一新時代の生誕に臨むわけである』<sup>1)</sup>と。惟ふに前述の如く此論争は財の生産以外に重大問題として分配問題の存在に氣付きたる新時代の關心を反映せるものである。ゴッドウィンは社會の貧窮を制度の改造(或は撤廢)によつて除き去らんと望んだが、これに反對したるマルサスも『貧の性質と其原因の研究』を志した者である。此論争それ自身かゝる時代の一表現として意義を有し、マルサスの勝利は、經濟學者をして人口理論に注意を向けしめ、これを基礎として分配問題を論ぜしめた。人口理論が經濟學に屬するか否かの問題に觸れずとも、人口の増加減少、その構成の變化を離れて多くの經濟問題を取扱ひ得ざることには明瞭となつた。かゝる意味に於て我々はスチブンの右の説に同意することが出来るであらう。(了)

邦文參考書

吉田秀夫氏 マルサス批評の發展

拙著 マルサス人口論の研究

マルサス對ゴッドウィンの人口論争

二五一

- 1) Sir L. Shephen, English Thought in the Eighteenth Century. vol. II. p. 327
- 2) J. Bonar, Philosophy and Political Economy. 1909, p. 211

